

実践報告

札幌市立清田中学校

(1) 研究内容

研究「性に関する学習の研究」

- 多様性の尊重
- 共生社会の実現

(2) 実践の内容

【実践①】教職員向け校内研修会の実施について

○ ねらい

性的マイノリティに関する基礎知識と当事者が抱える困難について、教職員の理解を深める。

○ 学習内容

北海道 LGBT ネットワーク代表の桑木昭嗣氏に上記のねらいに沿って講演をいただいた。講演の趣旨は次のような内容であった。

- ・ LGBT とは何か
- ・ LGBT に関する様々な統計結果について
- ・ ジェンダーと様々なセクシャリティについて
- ・ 当事者が差別的と捉える可能性が高い言葉について
- ・ LGBT 当事者の世代間格差について
- ・ 札幌における LGBT の状況について
- ・ 生徒からカミングアウトを受けたらどうしたらよいか
- ・ LGBT 当事者の意識調査の結果について
- ・ LGBT 認知に向けた取組について
- ・ LGBT の当事者の生徒と接する場合の留意点について

【実践②】人権教育【多様な性】道徳の授業について

○ ねらい

- ・ 生徒がセクシャルマイノリティについて正しい知識を獲得する。
- ・ 周囲にセクシャルマイノリティの人がいた時の適切な関わり方を学ぶ。

○ 学習内容

全校一斉の道徳授業を2時間行った。1時間目は、桑木氏に紹介していただいた映画『私はワタシ～over the rainbow～』（監督：増田 玄樹）を視聴し、ワークシートを利用して、LGBT に関する基礎的な知識を確認した。2時間目には、学習課題を提示し、課題探究的な授業を行った。それぞれの次の①～③の課題について、生徒からは次のような発表があった。

①（映像を思い出し）セクシャルマイノリティの人が抱えている悩みは何だろうか？

A：性的指向について

- ・ 好きな人ができても告白できない
- ・ 自分の好きな人について相談しにくい

B：性自認について

- ・トイレなど性別を表さないと入れないところに入りづらい ・自分の体が嫌になる

C：共通点

- ・いろいろ決めつけられたり、偏見が多い。 ・「普通ではない」と差別される。
- ・自分の思いを否定され、いじめられる。 ・周りの人に理解してもらえない。
- ・親や友達にうまくカミングアウトできず、一人で悩んでしまう。
- ・周りに差別用語を言われるのがつらい ・「自分は人と違う」と思い込んでしまう。
- ・カミングアウトしてバカにされたり、相談内容をばらされないかが心配である。
- ・日本はLGBTを想定した環境をつくれていない。社会が対応できていない。
- ・マジョリティの人たちの意見を押し付けられてつらい。

②もし、友人や家族からセクシャルマイノリティであると打ち明けられたら、あなたはどんな言葉をかけるだろう？

- ・打ち明ける側、打ち明けられる側、第三者に立場を分け、ロールプレイを行った。ロールプレイを行ったあと、それぞれどんな気持ちになったかを交流していった。

③カミングアウトをされたとき、大切なことは何だろう？

- ・否定せず、その人に親身になり、寄り添うこと。
- ・勇気を出して言ってくれたのだから受け入れて応援するべき。
- ・まずは「ありがとう」と感謝の気持ちを伝え、「つらかったね」と優しく共感する気持ちが大切だ。
- ・最後まで話をしっかり聞いて、受け止めること。何かあったら相談相手になる。
- ・これからもいつもと同じように接すること。 ・困っていることを聞く。

(3) 研究のまとめ

① 成果

- ・事後の生徒の振り返りからは、「差別用語を使わないようにしたい」「人それぞれ個性があるように、(LGBTも)その中の一つだと思えばいいと思った」「皆違って皆いいという言葉があるように、いろいろな人がいるのだから、お互いを受け入れる学校や社会をつくっていききたい」「自分の価値観や思い込みを他人に押し付けるのではなく、一人一人の多様性を認め合うことが必要だと感じた」「カミングアウトしやすい空気をつくっていききたい。1人で抱え込まないように相談にのっていききたい」といった声が数多く見られた。こうしたことから、多様性を尊重する心を育成することができたといえる。
- ・授業後に、友達同士の会話でLGBTQのような会話をしていたり、教師に対してカミングアウトした生徒もいた。全校で性的マイノリティについて肯定的な情報発信を行うことで、一人で抱え込む悩みが減ったり、自尊心が守られた生徒がいたと推測できる。
- ・授業前は映像を見て生徒がバカにしたように笑ってしまうのではないかと不安だったが、生徒は予想以上に真剣に映像を見ていた。大人である教師の世代よりも生徒の方が抵抗感なく映像を見ている印象を受けた。

② 課題

- 教師側からは、教える側の知識が不足していて、道徳の実践はまだ早かったのではないかという意見が複数あった。一方で、人権に関わることなので教師もすぐにも勉強して実践することが大切であるという意見もあった。
- 生徒の振り返り用紙には、心と体の性が一致していない人のために「更衣室に複数のカーテンを設けたほうがいいのか」「制服を選択できるようにしたほうがいいのか」といった意見も書かれていた。これは授業の成果でもあるが、こうした意見を教師側が今後どれだけ生かしていけるかが課題である。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- 本校では、教師側がセクシャルマイノリティについて理解を深められるよう、『セクシャルマイノリティ～ありのままのきみがいい～全3巻』（日高庸晴著 2015年 汐文社）を購入した。人権教育を推進していくには、教師間の共通理解が不可欠であると考え。来年度は、性別のよらない名簿を活用するという変更もあるが、それに加えて生徒の人権や命を守る視点から、性的マイノリティについての理解を深める実践が必要である。
- 人権教育啓発推進センターの人権ライブラリーでは、性的マイノリティに関する教材として利用できる様々な映像資料を借りることができる。本校でも、こうした資料を活用して、人権教育を継続していきたい。
- 本校では、来年度は外部人材を活用し、生徒に対して講演を行うことを考えている。映像資料もよいが、実際に性的マイノリティの方に生の声で話してもらうことで、生徒にとってより深く実感の伴った理解になっていくと考える。